

〔報告書〕 新潟医療福祉大学学術委員会主催ミニ・ワークショップ

保健・医療・福祉・スポーツ等多部門専門学会誌の国際化への現状と課題 —新潟医療福祉学会誌のPubMedへの道—

新潟医療福祉大学臨床技術学科／学術委員長 追手 巍
 新潟医療福祉大学救急救命学科／学術副委員長 竹井 豊
 新潟医療福祉大学医療情報管理学科／学術委員 瀧口 徹
 新潟医療福祉大学診療放射線学科／学術委員 児玉 直樹
 新潟医療福祉大学視機能科学科／学術委員 金子 弘

1 はじめに

2020年3月5日、新潟医療福祉大学図書館にて標記ミニ・ワークショップが開催された。奇しくも山本正治新潟医療福祉大学学長（新潟医療福祉学会会頭）が西澤正豊次期学長（現副学長）に交代する端境期に、山本正治学長（会頭）の指導によるこれまでの学会誌の充実と発展に感謝するとともに、その成果を礎として新潟医療福祉学会誌（特に英文誌）を医療・福祉・スポーツの分野において国際誌に昇格させる意義と指針を得るべく、山本正治学長、西澤正豊副学長臨席のもとに専門家2名を招聘し、ワークショップが開催された。



山本正治学長（左）、
西澤正豊副学長（右）

2 ワークショップでの意見集約手順

以下の手順で拡大学術委員会としての意見のブレインストーミングを行った。

1) 学会員を対象とした事前の意見調査：

アンケートによる学会誌の課題の洗い出し

2) 基調講演：

①現状と課題、②先進的な雑誌（編集者）からの提言、③インパクトファクターを上げる手立て（J-STAGE、PubMedへの道）

3) 3段方式によるミニ・ワークショップ：

①議論すべき課題の再整理 ②課題への解決策の提示
③解決策の優先順位の決定

3 基調講演



基調講演の講師（右から、追手 巍先生、高橋和広先生、小田島 互先生）

1) 新潟医療福祉学会誌の現状と課題

新潟医療福祉大学臨床技術学科教授／学術委員長

追手 巍

趣旨：新潟医療福祉学会誌（英文）の2001年発刊以来2019年までの全号（208編）の掲載区分の推移等の基礎情報と、新潟医療福祉大学と他大学とを比較して本誌の特徴が保健・医療・福祉・スポーツ関係の13分野に跨った内容という領域の広さを示した。PubMed掲載の日本科学雑誌127件（2019年7月現在、新潟医療福祉大学図書館調べ）では臨床、基礎の医学系雑誌では22件、医科13件、歯科2件、薬学7件がPubMedに登録している。

表1は全国の医療・福祉・スポーツ系94大学の医療・福祉・スポーツの分野（学科等）の開設状況の一覧で、関連分野総数で降順に並べている。表1に示すように新潟医療福祉大学の保健・医療・福祉・スポーツの関連学科は総計13であり、二番目以降と比



https://drive.google.com/drive/folders/1eFJKzhxNeX30EWp_04ZolbQ735JN15M?usp=sharing

著作権の都合で一部ご覧いただけない箇所があります

表1 医療・福祉・スポーツ系大学(94)の総分野数ランキング(降順)

医療福祉・スポーツ系大学	理学療法	作業療法	言語聴覚	義肢装具	臨床検査・工学	視機能	救急救命	診療放射線	健康栄養	健康スポーツ	看護学	社会福祉	医療情報	総分野数
1 新潟医療福祉大学	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	13
2 川崎医療福祉大学	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	9
3 国際医療福祉大学	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	8
4 北里大学	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	8
5 帝京平成大学	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	8
6 鈴鹿医療科学大学	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	7
7 東北福祉大学	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	6
8 東北文化学園大学	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	6
9 徳島文理大学	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	6
10 北海道医療大学	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	5
11 北海道科学大学	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	5
12 弘前大学	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	5
13 城西大学	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	5
14 日本医療科学大学	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	5
15 つくば国際大学	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	5
16 日本福祉大学	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	5
17 藤田医科大学	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	5
18 修文大学	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	5
19 名古屋大学	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	5
20 金沢大学	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	5

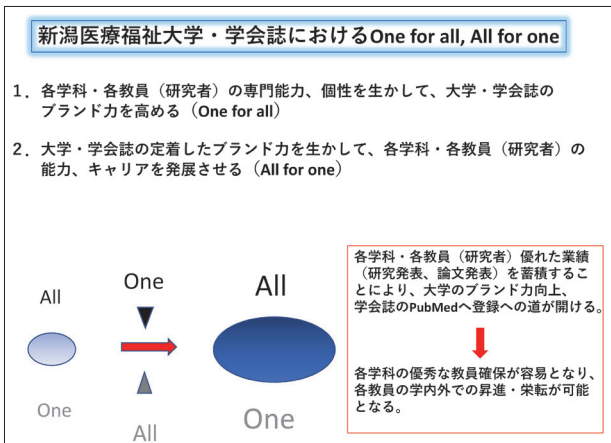


図1 新潟医療福祉大学・学会誌における One for all, All for one

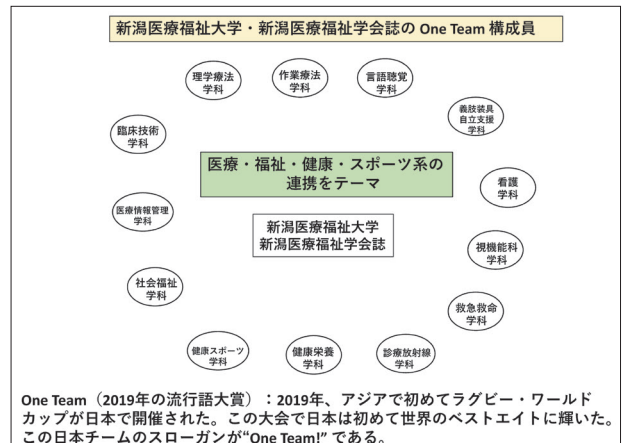


図2 新潟医療福祉大学・学会誌の One Team 構成員

較して最も多い。こうした多数の関連学科が一体となった科学雑誌でPubMedに登録されているものは内外ともに無い。この特徴を生かして医療関係多職種の専門誌としてインパクトファクター(IF)を高めていき、近未来にはPubMed掲載を目指したい。その際、肝心なことは2019年のラグビー・ワールドカップで日本チームの活躍でクローズアップされた図1、2に示すOne for all, All for oneのチームプレーであろう。

しかしながら、現状においては本学所属教員の679件の英文投稿論文のうち、新潟医療福祉学会誌(英文)掲載論文を引用しているのは9件のみであり、研究論文の本質的価値である研究者の引用が不十分な状態にある。(詳細はQRコード、またはURL参照)

2) 東北ジャーナル(TJEM)のこれまでの歩み
東北大学大学院医学系研究科教授／Tohoku Journal of Experimental Medicine(TJEM)副編集長 高橋 和広

(1) 東北ジャーナル(TJEM)が100年間続いた背景

①東北大学医学部の中心的存在の教授たちが、歴代編集長を務めてきた。(編集業務には若手研究者の育成と図書館の運営がかかっていた。)

②若手研究者の論文、特に学位論文の国際発信には重要な存在であった。(TJEMに筆頭著者として論文を1報発表して、医学博士



が受理されない例を聞いたことはない。)

③世界中の組織とのジャーナルの交換は、東北大学附属図書館医学分館の充実のために必須であった。

(2) TJEM の引用件数とインパクトファクターが増加した理由・背景

PubMed と J-STAGE に登録されていることが主因である。

(3) 教訓

①研究成果は英語で論文にして世界に発信しなければ、社会に貢献したことにはならない。

②インパクトファクターの高いジャーナルに、こだわって、研究成果を論文にしないまま、大学を去る研究者もいる。

③身近に、確実に論文をアクセプトしてくれるジャーナルを持つことも重要。

④ただし、医学領域の研究論文は PubMed に収録されているジャーナルに載せないと、国際発信にはならない。

(詳細は QR コードまたは URL 参照)



<https://drive.google.com/drive/folders/13uDcSz8mEIQnPA6pe3mWSE-T1TXuO-uo?usp=sharing>

3) PubMed 収録と J-STAGE の連携サービス

科学技術振興機構情報基盤事業部研究成果情報グループ

主任調査員 小田島 互

趣旨：小田島氏は今回、新潟医療福祉学会誌が目指す PubMed 登録、インパクトファクターを上げることによる国際的な貢献へのロードマップに関連した解説をされた。その要素は下記の 5 点であった。



(1) J-STAGE の概要

(2) PubMed 収録について

(3) J-STAGE の PubMed 連携サービス

(4) PubMed 収録のための準備 (参考)

(5) オープンアクセスについて (参考)

特に、J-STAGE の概要、PubMed の概要、PubMed に収録されるための前提となる Medline 収録の要件、申請方法等の説明がなされた。これらの要点を抜粋して示す (図 3~7)。

(詳細は QR コードまたは URL 参照)

このQRコードとURLは著作権の都合でご覧いただけません。

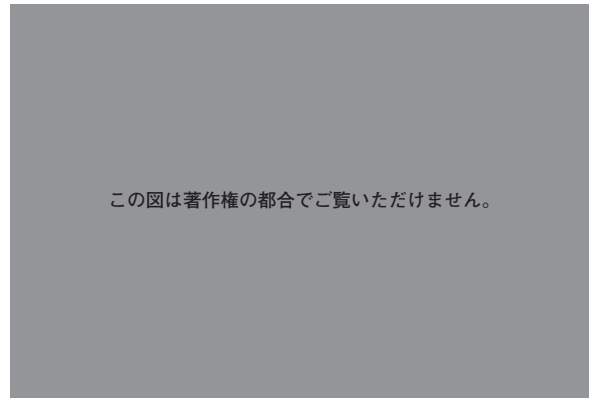


図 3 J-STAGE の概要

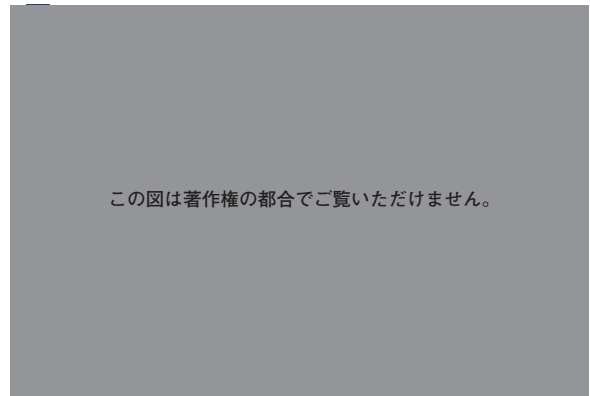


図 4 J-STAGE の概要

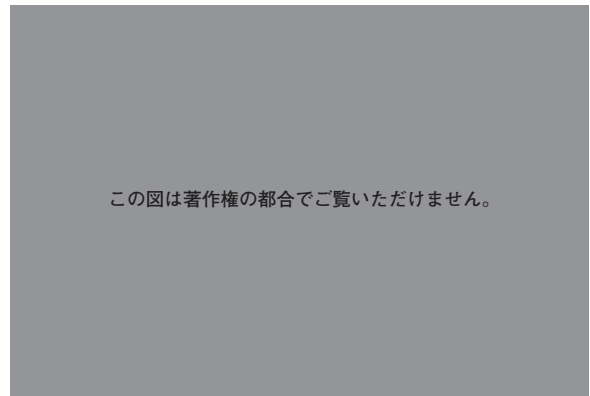


図 5 PubMed の概要

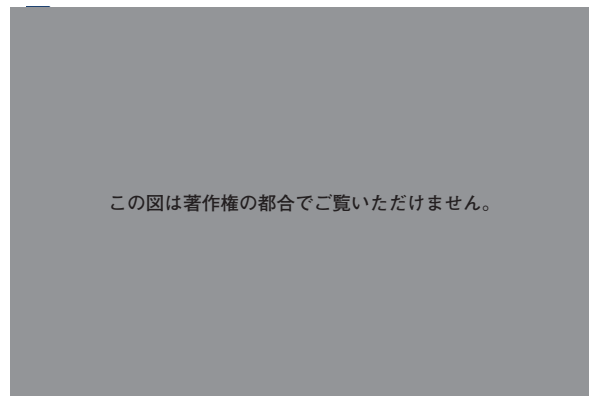


図 6 MEDLINE 収録の要件

この図は著作権の都合でご覧いただけません。

図7 MEDLINE への申請について

4 ミニ・ワークショップ成果物

1) 学会員の意見 (事前アンケート調査)

学術委員会ではミニ・ワークショップに先立つ2019年12月に、議論すべき優先順位の高いテーマを選定し、絞り込むための第一段階として学会誌に関する学会員の意見を集約する目的でアンケート調査を行った。表2はその結果のひとつであり「必要」という語が入っている文節(パラグラフ)を抜き出したものである。これらの事前調査をもとに3段階方式によるワークショップが開催された。



https://drive.google.com/drive/folders/1GccKLMH0sGY9nuJGbmwls0qzOrNka_PZ?usp=sharing

(詳細はQRコードまたはURL参照)

表2 新潟医療福祉学会誌(英文、和文)に関する学会員のアンケート結果

テキストマイニング分析ソフト: KH coder の KWIC コンコーダンスによる「必要」を含むセンテンス(パラグラフ) 抜粋

1. 保健医療福祉+スポーツという多学科の研究雑誌として専門性と広域性を持った特別な学会誌だと思えます。この長所は問題点も内在しており査読者との不適合、過適合が時折起きると思われまます。これを防ぐための方策が**必要**では。
2. 学会員だけでなく院生や学部生など多様に投稿しているようですが修論や卒業論文などはすぐれたものを発表する場を別誌に設けた方が良いでしょう。全員が研究者になるわけではないので。学会運営や査読など教育につなげて行くことも**必要**かと考えます。
3. まずは投稿数を増やすべきかと思えます。また、労力に見合ったインセンティブが**必要**かと思えます。
4. 学部生の卒業研究などから、優秀論文を投稿するシステムを作る。また、学外から閲覧しやすいシステム作りが**必要**かと思う。
5. 大学院生の登竜門としては良いが、研究者ごとの専門性がバラバラなので、明確な位置づけが**必要**と思われまます。
6. どこの大学でもあるように、“学内研究の場”という印象が否めないのですが、会員は学内に限定されていないので、会員の増員をしていく**必要**を感じます。地域の学術誌という地位を高めるうえでも、名称変更も**必要**と感じています。
7. 英文である以上国際性が**必要**で、それがIFに繋がるだがそれが保証されていない。
8. 学位取得に**必要**な論文であるために、無理に採択としたような質の低い論文が多く載っている印象がある。
9. 世界の研究者から参照されるために何といたっても質の高い研究をこの学会誌に投稿してもらうよう学内や関係各所に強くアピールすることが**必要**ではないか。
10. 英文誌の価値は掲載論文の引用頻度であり、将来、IFが付いたり、その値を上げてゆくためには、新潟医療福祉学会誌(英文誌)の論文を引用した論文を多く掲載する努力が**必要**である。
11. 学位に**必要**な論文であることを理由に無理に採択するのではなく、適切な査読を行い、質の悪い論文は不受理とすることで、質の向上が得られると思われる。
12. 学会自体の社会における知名度をどのように上げていくことができるか、考える**必要**があると感じます。
13. PubMedでヒットするIF付き(できれば1以上)の雑誌だと、投稿数も増えると思えます。学位論文の受け皿という位置づけなら、それはそれで**必要**であるとは思いますが。
14. この学会誌が持つ強みや他にない特徴は何かをはっきりさせて、それを積極的に打ち出すマーケティングの手法が**必要**ではないか。
15. 学会誌の質を上げて行くには優秀な査読者を数多くそろえておく**必要**がある。このため学内だけでなく、広く学外、希望的には海外の査読者もそろえておくことが**必要**と思える。それにはEditorialBoardのメンバーも広い学問領域から選別しその人数も多くすることにより、連動して優れた査読者の探しだすことができると思えます。
16. 学会誌の特色として、「新潟医療福祉学」(新潟をフィールドとする、新潟の医療福祉を考察するなど)の学会誌として打ち出せれば、学会名称と学会の実態が合うように思いました(もっとも学会誌として「新潟」に限定する**必要**はないと思いますが、特色のひとつとして加えるのもよいかと思いました)。
17. 倫理委員会承認とのリンクの整合性の問題を、2、3度指摘してきた経験から少なくとも論文で扱ってかわれている対象者が倫理委員会承認を受けた対象内に入っているかの確認が**必要**。もし問題があれば論文は差戻が**必要**。
18. 委員会の委員の先生方の貢献にのみ期待するのでは限界があります。専従の有給の担当者の雇用が**必要**かと考えます。

2) 3段階方式によるミニ・ワークショップ

ミニ・ワークショップ参加者（講師、コメンテーター、当日参加者）から3段階方式で意見を集約した。以下、各ステップで集約した意見を図に示す。

ワークショップ1：新潟医療福祉学会誌の課題の再整理

ファシリテーター：新潟医療福祉大学視機能科学科

准教授 金子 弘

事前のアンケート調査と学術委員会の意見から、課題を4項目に整理したもの（図8）をワークショップ1に諮った結果、表現の手直し以外に2項目（No.4, 5）が課題として追加され6項目としてワークショップ2に送られた（図9）。



ワークショップ2：新潟医療福祉学会誌の課題への対策

ファシリテーター：新潟医療福祉大学診療放射線学科

教授 児玉 直樹

ワークショップ1で課題とされた6項目の解決策が討議され、ワークショップ3に送られた（図10）。

WS.1 新潟医療福祉学会誌の課題の再整理 (学内アンケートより)

1. ローカル色(大学内部色)が強く国際性が低い
2. 査読体制が不十分、論文の質が上がりにくい
3. 学際的なので学問的位置づけが不明確
4. 専用のWebサイトがない(電子ジャーナル化ができていない)

図8 ワークショップ1 課題の再整理
(学内アンケートより)

WS.1 新潟医療福祉学会誌の課題の再整理 (学内アンケート+当日の意見)

1. ローカル色(大学内部色)が強く国際性が低い
2. Reviewerの選定、査読体制が不十分、論文の質が上がりにくい
学内外/国内外からの査読者の選定
3. 学際的なので学問的位置づけが不明確
4. 教員・職員・Reviewerの負担が大きい
5. 投稿論文の質が低い(学位論文の駆け込み寺)
6. 独自のWebサイトがない

図9 ワークショップ1 課題の再整理
(学内アンケート+当日の意見)



コメンテーターの横山豊治先生(右)と大西秀明先生(左)

WS.2 新潟医療福祉学会誌の課題への解決策

1. ローカル色(大学内部色)が強く国際性が低い
 - オープン・アクセス化(CCライセンス付)を推進する
 - 英文誌名を変更/和文誌名は維持する
2. Reviewerの選定、査読体制が不十分、論文の質が上がりにくい
 - 海外の研究者を編集委員に含む
3. 学際的なので学問的位置づけが不明確
 - 英文誌のaim&scopeを明快にする
4. 教員・職員・Reviewerの負担が大きい
5. 投稿論文の質が低い(学位論文の駆け込み寺)
 - 英文誌はPubmed掲載を目指す/和文誌は現在の英文誌の役割を維持
6. 独自のWebサイトがない
 - Journal専用サイト(英文誌→和文誌)の開設する

図10 ワークショップ2 課題への解決策

ワークショップ3：上記対策案の優先順位（図11）

ファシリテーター：新潟医療福祉大学救急救命学科

教授 竹井 豊

WS.3 新潟医療福祉学会誌の課題への優先順位

1. ローカル色(大学内部色)が強く国際性が低い
 - オープン・アクセス化(CCライセンス付)を推進する
 - 英文誌名を変更/和文誌名は維持する
 - # 大学所在の地名をどうするか要検討(過去の事案から)
 - # タイトル変更は年数が遠くなるため、変更後はPubmed掲載等への時間要
2. Reviewerの選定、査読体制が不十分、論文の質が上がりにくい
 - 海外の研究者を編集委員に含む
 - 査読チェック表・割付チェックの充実→論文の質の向上につながる #事務の充実も必要
3. 学際的なので学問的位置づけが不明確
 - 英文誌のaim&scopeを明快にする
4. 教員・職員・Reviewerの負担が大きい
5. 投稿論文の質が低い(学位論文の駆け込み寺)
 - 英文誌はPubmed掲載を目指す/和文誌は現在の英文誌の役割を維持
 - # Pubmedは厳しい、まずはJSTAGEか
6. 独自のWebサイトがない
 - Journal専用サイト(英文誌→和文誌)を開設する
 - # 中国などからの投稿の可能性

図11 ワークショップ3 課題への優先順位

5 おわりに

西澤正豊新潟医療福祉大学副学長（次期学長）は閉会の辞において焦眉の急の対応としてJ-STAGEへの登録を検討する必要があるとの見解を示した。最後に、遠路参加いただいた高橋和広、小田島互両氏に感謝するとともに、今後もサポートいただけるようお願いし閉会した。

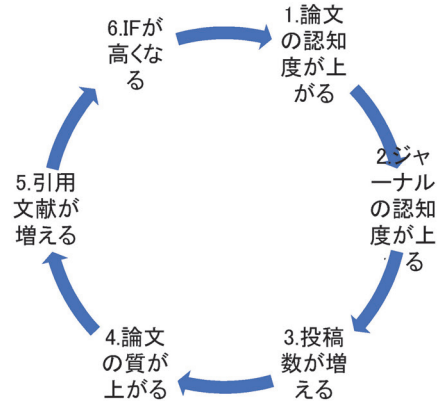


図 12 PubMed を目指すメリット

6 今後の取り扱い

新潟医療福祉大学学術委員会ではPubMedを目指すメリットを図12のようにとらえ、このメリットを共有し、今回のワークショップの討議を踏まえて新年度の学術委員会で学会誌（特に英文誌）の電子ジャーナル化やJ-STAGEへの登録等に早急に取り組み、5年を目安としてPubMed登録への階段を上っていくことが確認された。



ミニ・ワークショップでの意見交換の様子

付表 ミニ・ワークショップ参加者

山本 正治 新潟医療福祉大学学長（新潟医療福祉学会会頭）
西澤 正豊 新潟医療福祉大学副学長

講師

高橋 和広 東北大学大学院医学系研究科教授／TJEM 副編集長
小田島 互 科学技術振興機構情報基盤事業部研究成果情報グループ主任調査員
追手 巍 新潟医療福祉大学臨床技術学科教授／学術委員長／英文誌編集委員

司会進行

瀧口 徹 新潟医療福祉大学医療情報管理学科教授／学術委員／英文誌編集委員

ファシリテーター

竹井 豊 新潟医療福祉大学救急救命学科教授／学術副委員長／英文誌編集委員長
金子 弘 新潟医療福祉大学視機能科学科准教授／学術委員／和文誌編集委員
児玉 直樹 新潟医療福祉大学診療放射線学科教授／学術委員／英文誌編集委員

コメンテーター

大山 峰生 新潟医療福祉大学作業療法学科長／同大学大学院研究科長
大西 秀明 新潟医療福祉大学リハビリテーション学部部長／同大学理学療法学科長
横山 豊治 新潟医療福祉大学社会福祉学科教授／同大学大学院社会福祉学専攻長
松井 由美子 新潟医療福祉大学看護学科長
宇田 優子 新潟医療福祉大学看護学科教授
木下 直彦 新潟医療福祉大学医療情報管理学科講師
中村 委代 新潟医療福祉大学図書館・学習支援課

ワークショップ・メンバー

浅尾 章彦 新潟医療福祉大学作業療法学科助教／学術委員／英文誌編集委員
西原 康行 新潟医療福祉大学健康スポーツ学科長／学術委員
山口 典子 新潟医療福祉大学看護学科准教授／学術委員／和文誌編集委員

当日参加者

能村 友紀 新潟医療福祉大学作業療法学科准教授
阿部 薫 新潟医療福祉大学義肢装具自立支援学科教授／同大学大学院保健学専攻長
長濱 大輔 新潟医療福祉大学臨床技術学科教授
池上喜久夫 新潟医療福祉大学臨床技術学科講師
神蔵 貴久 新潟医療福祉大学救急救命学科講師
鈴木 一恵 新潟医療福祉大学健康栄養学科准教授
佐藤 大輔 新潟医療福祉大学健康スポーツ学科教授／同大学大学院健康科学専攻長
杉崎 弘周 新潟医療福祉大学健康スポーツ学科准教授
杉本 洋 新潟医療福祉大学看護学科准教授
寺田貴美代 新潟医療福祉大学社会福祉学科教授
柴山 純一 新潟医療福祉大学医療情報管理学科長
石上 和男 新潟医療福祉大学医療情報管理学教授

ファシリテーター補佐

高野 晃輔 新潟医療福祉大学医療情報管理学助手／同大学大学院医療福祉学研究科博士課程
波塚 飛鳥 新潟医療福祉大学大学院医療福祉学研究科修士課程
皆川 璃子 新潟医療福祉大学大学院医療福祉学研究科修士課程

新潟医療福祉学会事務局

権瓶 一葉 新潟医療福祉大学総務部総務課
阿部つばさ 新潟医療福祉大学総務部総務課